

中世曹洞宗における機関について

——宏智八句を中心として——

龍 谷 孝 道

はじめに

中世曹洞宗では、数多くの公案に対して、自己の見解や境界を著語によって示し、それによって師の証明を受けるといふ学風が生じ、機関についても同様の参得方法がとられた。そのような記録は、具体的には門参における参話目録などに見られ、透過すべき公案や機関の一覧がそこに示されている。その中に、五位・臨濟四料揀等に加えて、宏智八句という機関がしばしば確認できる。

宏智八句とは、宋代曹洞禅を代表する宏智正覚の『宏智録』における八句の偈のことを指し、前八句（『宏智録』巻四第三五小参冒頭の偈）と後八句（『同』巻一第三小参冒頭の偈）という二種が存する。

【前八句】一段光明亘古今、有無照破脱情塵。当頭触著弥天過、退步承当特地新。紫極宮中鳥抱卵、銀河浪裏兔推輪。是須妙手携来用、百億分身处处真。（泉福寺所藏宋版『宏智録』¹⁾巻四、

四四丁裏、訓点・句読点筆者）

【後八句】髑髏前有本来靈、照徹毘盧頂寧平。玉馬過関方半夜、木鷄喚月恰三更。寥寥跡絶全功轉、歴歴光生借位明。却著弊衣垂化手、合同缸子順流行。（『同』巻一、五六丁表、訓点・句読点筆者）

日本曹洞宗における宏智八句に対する参究の様相は、門参を中心によく見られる傾向があり、宏智八句に対する下語や著語を付すもの、あるいは仮名書きの抄を付すものなど、多様な形態が見出され、かなり重要視されていたと推察される。

しかし、この宏智八句とは、本来的にはあくまでも宏智の小参説示の一部を占める偈頌であり、中国では正覚以後、八句が特別重用されたり、機関として扱われたということは確認できない。つまり、二種の八句が『宏智録』の小参説示から独立し、「宏智八句」という機関になったのは日本独自の傾向であると考えられる。そこで本発表では、このような宏智八句という機関が如何にして成立したのか、その背景につ

中世曹洞宗における機関について（龍谷）

いて、了庵派抄物によって考察を加えたい。

一 了庵派抄物と宏智八句

了庵派は相模最乗寺を開山した了庵慧明（一三三七～一四二二）を祖とする門派であるが、同派には門参・切紙を中心として多くの抄物資料が残されている。

本論で扱うのは、①慧明の代語集『大雄山最乗禅寺御開山御代』（寛永十年（一六三三）書写、最乗寺所蔵、以下『了庵代』）、②慧明の法嗣である無極慧徹（一二五〇～一四三〇）の代語集『小参無極大和尚下語』（寛永三年（一六二六）頃書写、雙林寺所蔵、以下『下語』）、③雙林寺八世大興玄隆（一五五〇寂）作成の門参『泰叟一州八句之御着語八句之書』（十六世紀半ば成立、雙林寺所蔵、以下『八句之書』）、以上三種の抄物である。

二 代語集における宏智八句

まずは、その撰者から最も古い年代のものと考えられる慧明と慧徹の代語集を見てみたい。慧明の『了庵代』は節季や叢林行事に因んだ慧明の代語を収録するものであり、通常の代語集の形式をもつものである。これに対し、慧徹の『下語』は全編が『天童小参録』の説示に基づいた代語提唱録となっている。その形式は『天童小参録』の各説示から適当な語句を抽出し、それらに対してふさわしい代語を付すもので、そ

れが三六の全ての小参説示におよんでいる。『天童小参録』は当然ながら、『宏智録』巻四の別行本であり、『天童小参録』の第三五小参には前八句が含まれている。そこで「下語」の第三五小参に対する提唱部分をみると、以下のように前八句全てに対して代語が為されている様子が明らかとなる。

一段光明亘古今、^代我有一言天上人間／有無照破脱情塵、^代一句合頭处、豈涉智不智／当頭触著彌天罪、^代望深洩如薄氷蹈、^{後代機}不離位墮在毒海／退步承当特地新、^代富士見ント□りし人は外ニ^{キテ}来て、^{取句}鶴出銀樓冲霄漢／紫極宮中鳥抱卵、^代更参三十年／銀河波底推兔輪、^代暗中不見依門人、^{取句}一氣讀出氣、未不落逢門／是須妙手携来用、^代無數過船看不見、人声却在櫓声中／百億分身处处真、^代円同大虚無欠無余／八句一句道将来、^代白露ノ己ガ質ノ其ノ俣ニ紅葉ニラケバ紅イノ玉、^{（下語）}一四丁裏／一五丁表、読点・傍線筆者）

また『了庵代』もその構成をよく調べると、末尾の八一丁表から九〇丁裏にかけてはその趣きを異にしていることがわかる。実はこの部分のみは行事に因んだ垂示・提唱の記録ではなく、『宏智録』巻一の小参部分を基にした代語の記録となっているのである。それは「下語」と同じ形式のものである。この部分のみは慧明による『宏智録』の提唱録と捉えるべきであろう。つまり、『了庵代』という一冊の代語集の中に、性質の異なるもう一つの代語集が存在していることになるのである。そして、『了庵代』における『宏智録』巻一第三小

参に対する提唱部分を確認すると、こちらでもやはり後八句それぞれに対する代語が確認できる。

鬻饌前有本来靈、代以肉存肉生身靜、普觀本地靈光明／照徹毘盧頂寧平、代寂無形影／玉馬過関正半夜、代智々用々、別処当理／木鷄喚月恰三更、代自古兩輪光不到、別是洞中一片天／寥々絶跡転全功、代心徑蒼生／歷々光生借位明、代回途廣雪顧、門裏綠苔新／却著弊衣垂下手、代国師年老心一草／合同船子順流行、代天下任天下、我天下叶徑（『了庵代』八二丁表、読点筆者）

この二書にみえる宏智八句とは、慧明・慧徹による『宏智録』の小参提唱に基づいて記録されたもので、小参説示を提唱する過程で八句それぞれに代語がなされたものである。つまり、当初から門参に見えるような、機関として一つの独立した拈提対象となっていたのではなく、あくまで『宏智録』小参の説示を順に提唱していく中で八句に対する代語がなされたのである。

三 宏智八句に関する代語集と門参の關係

次に『八句之書』における宏智八句の記述を確認したい。『八句之書』は各種機関に付された代語や仮名書きの注釈を集成したものである。この冒頭に、龍穩寺開山泰叟妙康（二四〇六～一四八五）と雙林寺二世一州正伊（二四一六～一四八九）による前八句に対する代語が収録されている。ここでは正伊の八句を次に示したい。

中世曹洞宗における機関について（龍谷）

一州和尚 八句／一段光明、唯一堅密、現／有無照、万機頓縁思／当头触、機不離、毒海／退步承、揚開金鎖、自異／紫極宮、真箇法王妙中妙／銀河波、去時踏雪、功迷／是須妙、手指空時、紗籠／百億分、周遍十方身、処（『八句之書』一丁表、読点・傍線筆者）

本書はその題名からも明らかのように、正伊と妙康の八句に対する著語が最も重要なものとして扱われている。またここにおいて、小参説示中の一偈頌であつたものが、明確に「八句」（傍線Ⅱ）として位置づけられている様子が確認できる。このことから、玄隆の時代、少なくとも一六世紀半ばには、この宏智八句というものが一つの独立した拈提対象として重視されていることがわかる。また『八句之書』には宏智八句に対する著語のみではなく、五位を始めとした種々の機関に対する著語が収録されているが、このような先人の代語や著語を集成する門参が成立するのは如何なる理由からであろうか。それは、当時の禅僧が代語集や語録抄などから適宜重要な文言を抽出し、自己の参学の便を図つたためであると考えられる。すなわち、『八句之書』に記される妙康や正伊の代語は、先行して存在する彼らの提唱を記録した文献から抽出されたものと考えられる。

この点に関して石川力山氏は、石屋派所伝の『山雲海月図』に峨山韶碩（一二七六～一三三六）や明峰素哲（一二七七～一三五〇）による宏智八句に対する著語が存することについて

中世曹洞宗における機関について（龍谷）

て、「まとまった提唱の記録」というものがあり、そこから特定の語句や著語が別出されて、機関・公案やそれに対する著語の集成としての門参が成立する過程を推察されている。⁽²⁾ この見解を『八句之書』に当てはめてみると、正伊や妙康には『宏智録』の提唱録が存在し、そこから宏智八句の部分が別出されて、門参の中に記録されたことになる。なお、前項の慧明・慧徹による代語集は、まさしくこのようなまとまった提唱の記録の存在を証明するものと言えるであろう。

むすびにかえて

最後に本論の考察から導かれる宏智八句の成立背景を述べてむすびにかえたい。まず三種の資料からは、慧明・慧徹、また正伊・妙康は、宏智八句を機関として捉えていたわけではなく、『宏智録』を順に提唱する過程において、八句に対して代語を付していったものと考えられる。ただ、「下語」の末尾の一句（傍線Ⅰ）が示すように、この段階で八句全体を一つの参すべきものとして捉える傾向が生まれていることには注意が必要である。おそらく韶碩や素哲を始めとする当時の曹洞禅僧達によって『宏智録』が参究される中で、この八句が特に意識されるようになったのであろう。そして、そのような『宏智録』に基づく禅僧の講義録や提唱録が、玄隆の頃には別出されて門参に組み込まれ、小参説示とは独立し

た拈提対象として認識されることになったと考えられる。以上から、宏智八句という日本独自の機関は、中世曹洞禅僧による『宏智録』の提唱が基となり、それらが門参に組み込まれる過程で生じたものと考ええる。

なお、本論の考察はあくまでも了庵派の中の、それも最乗寺と雙林寺の資料のみからの一試論である。当然ながら、他派の抄物との比較が必要であり、また『宏智録』の数ある説示のうち、二つの八句が重視された理由についても検討する必要がある。特に後者については、中世曹洞禅僧達が門弟育成という意識をもって『宏智録』を参究した傾向の存することをその理由の一つに考えているが、今後の課題として検討を進めたい。

- 1 宋版『宏智録』は石井修道編輯禅籍善本古注集成『宏智録』上（名著普及会、一九八四年）に拠る。
- 2 石川力山「肥前円応寺所蔵『大庵和尚下語』について」（『宗学研究』二二、一九八〇年三月）一六五頁。

〈キーワード〉 機関、宏智八句、『宏智録』、了庵慧明、無極慧徹
（駒澤大学大学院）